

平成 23 年度 学位論文

「自閉症児の食行動に関する調査研究

—特別支援学校での質問紙調査—」

兵庫教育大学 修士課程

特別支援教育学専攻

心身障害コース

田能 綾佳

M10103I

# 目 次

## 第 1 章 問題と目的 . . . . . 1

### 第 1 節 問題の所在

1. 食行動の定義
2. 健常児における食生活に関連する問題
3. 知的障害児における食生活に関連する問題
4. 自閉症児における食生活に関連する問題

### 第 2 節 本研究の目的

## 第 2 章 事前調査 . . . . . 13

### 第 1 節 自閉症児者へのインタビュー調査

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

### 第 2 節 特別支援学校での質問紙調査

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

### 第 3 節 小学校通常学級での質問紙調査

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

## 第3章 本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

### 第1節 特別支援学校での質問紙調査

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

### 第2節 小学校における事前調査と本調査の比較

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

## 第4章 総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108

### 第1節 自閉症児の特徴

1. 本研究のまとめ
2. 自閉症児の食事指導のありかた

### 第2節 今後の課題

1. 調査対象児者について
2. 調査内容について

## 引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117

謝辞

資料

# 第 1 章 問題と目的

## 第1節 問題の所在

### 1. 食行動の定義

食生活指導の基本的な流れは、食行動アセスメントから始まり、「食との関わり」に応じた肥満に対する目標設定や食行動変容のための実践を支援していく。

食行動とは「摂食、つまり食べるという現象に関係する特定の行動が意識的に、または無意識にくり返し行われることにより、日常生活の中に定着した習慣」である。そのため食行動上の問題には、偏食や大食、欠食、食への無関心などが対象となる(今田ら, 2006)。

本研究においても、今田らの食行動の定義を引用していくこととする。

### 2. 健常児における食生活に関連する問題

現在の児童における食生活に関連する問題点として、朝食の欠食、両親の共働きや塾通いによる孤食、欲しい時に欲しい量だけ食べられるおやつのととり方、偏食、肥満傾向児の増加や生活習慣病の若年化など、様々な事柄が挙げられる。

#### (1) 健常児の肥満

肥満傾向児を示す肥満度は、財団法人日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル(平成18年度改訂版)」によって身長別標準体重を算出し、年齢・性別から測定される。肥満度が20%以上の児

童を「肥満傾向児」、-20%以下の児童を「痩身傾向児」としている。  
計算式は以下の通りである。

$$\text{肥満度（過体重度）} = [\text{実測体重（kg）} - \text{身長別標準体重（kg）}] / \text{身長別標準体重（kg）} \times 100（\%）$$

文部科学省の平成22年度「学校保健統計調査」による通常学校の児童生徒の肥満傾向児・痩身傾向児の割合と比較すると、肥満傾向児で一番高い割合を示したのは15歳男子の約12.4%、一番低い割合を示したのは6歳女子の約4.2%であった。また、痩身傾向児で一番高い割合を示したのは12歳女子の約3.9%、一番低い割合を示したのは7歳男子の約0.4%であった。肥満傾向児の出現率は平成15年度あたりから減少傾向となっており、痩身傾向児の出現率は平成18年度以降から増加傾向となっている。17歳の年間発育量をみると、男子では11歳から14歳時に発育量が著しくなっており、11歳時に最大の発育量を示している。女子では、10歳と11歳時に発育量が著しくなっており、11歳時に最大の発育量を示している。つまり、健常児の男女ともに小学校高学年時に発育の変化が現れやすく、肥満や食生活にも変化が現れていることが考えられる。

## （2）健常児の食育

児童期は基本的な食習慣が形成される時期であり、この時期に身についた食習慣は、生涯にわたる健康をも左右する。したがって、児童期の食生活の乱れは、子ども達に間違った食意識を身につけさ

せることになり、将来、自立した正しい食生活を営むことが難しくなり、生活習慣病などさまざまな食に起因する疾病の危険性を持つことになる。

以上の理由により児童期における「食生活」の適切な指導は重要課題である。偏った栄養摂取、不規則な食事、肥満や生活習慣病の増加、過度の痩身志向、新たな「食」の安全や、海外への依存が問題となり、国民が食生活の改善の面からも、安全の確保の面からも、自ら「食」のあり方を学ぶことの重要性が求められ、2005年に食育基本法が成立した。基本法に基づいて2006年に国から食育推進計画が策定された。こうした国の政策を受け、「食」に関する指導は、これまで家庭や学校で行われてきた。

学校においては、給食の時間や教科指導（家庭科や保健体育科など）、学級活動、総合的な学習の時間などで行われてきたが、さらなる充実のため、2005年4月より栄養教諭制度が発足した。栄養教諭は栄養に関する専門的な教員として、学校における食育の中心に位置づけられた。今後、段階的に配置が進められるであろう。

一方、家庭における食育も重要である。児童の食生活は、主として食事を担当する保護者に依存する。したがって、食事担当保護者の責任は重く、児童が幼いうちから、発達段階に合わせた正しい食習慣や食知識を身につけることができるよう指導する必要がある。保護者の食意識が良好で、適切な食生活を実践していれば、児童にもそれが反映し、適切な食習慣や食意識を身につけさせることも容易となる。

### (3) 健常児の感覚過敏

自閉症児の感覚過敏を明らかにしていく上で、健常児の感覚過敏について現在どの程度注目されているか把握する必要があると考える。

自閉症の障害特性の中で、最近特に注目を集めてきていることの一つに「感覚過敏」の問題があるが、健常児の感覚過敏について調査した研究は見当たらないのが現状である。その理由としては、感覚過敏の基準が主観的な意識の差が影響したり、食生活の問題における背景要因には取り上げられなかったりすることが考えられる。

その中で、健常者を主とした研究ではないが、自閉症者と大学生との感覚過敏の比較に関する研究が高橋ら（2008）により行われている。その結果、自閉症学生は健常学生に比べ、視覚過敏は20.4倍、嗅覚過敏は19.8倍、味覚過敏は14.8倍、聴覚過敏は12.8倍、触覚過敏は10.5倍の差があるものの、割合が高い人と低い人との個人差が大きいと言われている。本人が求める感覚過敏の理解支援においては、健常学生との差が一番高いもので聴覚過敏の17.6倍から始まり、嗅覚過敏の15.3倍、視覚過敏の9.7倍、触覚過敏の4.5倍であった。そのため、食べることとしては15.6倍もの差が現れていた。

以上の結果から、子どもの場合はより過敏性が高いことが推測され、自閉症児と比較し、自閉症児の感覚過敏を明らかにする上で、健常児の感覚過敏についての調査が必要である。



### 3. 知的障害児における食生活に関連する問題

厚生労働省の厚生労働調査によると身体障害児者全数、精神障害児者全数に占める65歳以上のものの割合がそれぞれ59%、29%であるのに対し、知的障害児者のその割合は、3%と極端に低い。この原因のひとつとして、知的障害者は生活習慣病（糖尿病、脳卒中、心臓病、高脂血症、高血圧、肥満など）に罹患する割合が健康な人や他の障害のある人よりも高いと考えられている。知的障害をもつ子どもは、健康に対する自己管理能力が高くなく、バランスの取れた食生活をしたり適度な運動に心がけたりすることが多い。その結果、肥満傾向を呈する割合が高くなり、その結果として生活習慣病に罹患するリスクが高くなると考える。

#### (1) 知的障害児の肥満

文部科学省の平成17年度学校保健統計調査「年齢別肥満傾向児出現率の推移」と比較すると、知的障害のある児童生徒の肥満傾向または肥満の出現率は、健常児が11歳～12歳で10%を超えているのに対し、小学部低学年で16%と極めて高い（滝川，2007）。

知的障害者（特に在宅の知的障害者）では肥満が最も大きな生活習慣病の危険因子であること、肥満になり始めた時期は、まだ家族によるコントロールが可能な年齢であることから、小学部高学年もしくは中学部から徐々に肥りだすこの時期の肥満から注目していくことが肥満予防の上でもっとも重要である（浜口ら，2000）。

知的障害特別支援学校で行われている健康管理に関する事例としては、肥満の改善と体重の維持、肥満の予防に関する具体的な取り組みがなされているところが多い。学校保健という視点から学校教

育を見直すことが大切だと考える。たとえば、個別の教育支援計画を策定する際には健康という観点から養護教諭も積極的に参加したり、授業を組み立てる段階で肥満に関する指導を積極的に取り入れたりして、教師が児童生徒の肥満予防あるいは健康ということを明確に意識しながら授業を展開することが求められる（滝川，2007）。

## （2）知的障害児の食育

知的障害特性から現れる食行動上の問題には、過栄養や低栄養、併存症、軟食の過食、偏食、早食い、丸呑み、だらだら食いなどが多い（大和田，2009）。その背景要因として、強迫概念・こだわり行動、咀嚼嚥下機能の発達障害、同一性保持などから食べ物の好悪に影響していることが多い（原ら，2001）。

特別支援学校卒業後に、日常的に運動する生活習慣は、健康管理上欠かせない。しかしながら、卒業後にこの習慣が身に付くことは考えにくく、在学中に学校と家庭とが連携して、身体を動かす楽しさ、大切さを児童生徒が学ぶことが大切だと考える。その際、地域資源、社会資源の利用も積極的に行い、卒業後の余暇活動指導を行うことも必要である。

今度、知的障害特別支援学校においては、これまで以上に養護教諭を中心としながら教育活動全体に管理、健康に関する視点を取り入れることが望まれる。

### (3) 知的障害児の感覚過敏

健常児と同様に、知的障害児の感覚過敏を中心に調査した研究は見当たらないのが現状である。川崎ら(2003)により、高機能自閉症だけでなく、知的障害を伴う自閉症も含めた対象者を比較した結果、知能の程度にかかわらず、自閉症の大多数の者が聴覚過敏や触覚過敏等の問題を有していることが明らかにされている。そのため、自閉症を伴わない知的障害児においても偏食など食行動上の問題の背景に、こだわり行動なども示唆されており、知的障害児の感覚過敏を明らかにする調査が求められる。知的障害特別支援学校に在籍する自閉症児を調査する上で、知的障害児の感覚過敏についての調査を行い、知的障害を伴う自閉症児の感覚過敏を明らかにする必要性が考えられる。

## 4. 自閉症児における食生活に関連する問題

自閉症児の幼児期から小学校低学年に多い問題は偏食であるが、小学校高学年以後になると肥満が大きな問題となる。そのため、肥満度20%以上の肥満児が5%の健常児と比べて、自閉症児は30%と高い数値が見られる(杉山, 2001)。

### (1) 自閉症児の肥満

自閉症児は、健常児と比べて運動面で活発な動きが少なく、肥満になりがちである。偏食傾向から肥満になると更に拍車がかかり、情緒不安定の悪循環にもなる。また、肥満を本人自身が意識できず、

動機づけが非常に困難で、保護者の健康管理がそのまま子どもの肥満として反映してしまう。肥満児が青年期になると、成長発達が少なる一方で生活習慣も固定化してしまうため、更なる運動不足や偏食・過食、肥満の進行が予測される（下田ら，2001）。

知的障害のみの児童生徒と自閉症・自閉症傾向の児童生徒を比較すると、男子には有意差がなかったが、女子は高等部の自閉症・自閉傾向の生徒が約40%と有意に高かった。また、学年が上がるにつれ高度肥満の割合が高くなり、症候性肥満や生活習慣病、薬の関与による副作用の関与はみられず、単純性肥満が中心であった（中ら，2003）。

## （2）自閉症児の食育

自閉症児の健康を阻害する要因として飲食と睡眠の異常がある。これらは現在の生活の幅を狭めるだけでなく、将来的健康の保持にも身体の発育に影響する重大な問題である。知的障害を伴う自閉症児には知覚過敏が多く、知的障害の重度な者ほど、趣味やスポーツへの参加が困難で、その分食事への関心が集中する傾向があり、食行動指導は重要課題となっている。

自閉症の障害特性として、興味や関心が狭く特定のものにこだわる事が挙げられ、食行動として特定の好きな食べ物だけしか口にしなくなる傾向、いわゆる偏食傾向が現れることが多い（杉山，2001）。これら偏食，異食の原因としては過敏性とこだわり行動が考えられるが、それだけでなく、食べられる物と食べられない物を区別する学習のように、通常であれば自然に身につくはずの「食べる」とい

う行為自体の意味理解が必要な場合がある。また、何でも口に入れてはいけないというルールを教え、その後も、自分で思い出す方法を身につけるといった手続きが必要な場合もある。

また行動の自己コントロールが難しいために過食傾向が現れ、肥満の問題がおこってくることも多い。他にも、嫌いな食べ物が出された時に、食べなければならないという思いから強迫的にそれをすべて食べてしまい、結果として不快経験を味わってしまう強迫的行為を示す場合もある（大竹ら，2005）。これらの背景要因として、自閉症スペクトラム児は食事への関心が集中する傾向があることや、見た目の違和感、味覚過敏、触覚過敏、食感の違い、におい、字義どおりの受け取り方などが食べ物の好悪に影響していることが多い。

### （3）自閉症児の感覚過敏

自閉症児者の障害特性として、感覚過敏の問題が最近注目されている。多くの高機能自閉症者によって、いかに感覚過敏が辛いものであるかが語られると同時に、自閉症児者の原因不明のパニック行動にもこの問題が関与している可能性が示唆されている（小松ら，2005）。

自閉症の感覚刺激に対する異常な反応に関しては、カナー(1943)が自閉症について初めて報告した論文やその翌年にアスペルガー（1944）が発表した論文の症例の中にも見られ、当初から自閉症の特徴の一つとして注目されていた。その後、自閉症の国際的な診断基準である DSM-IV（APA，1994）や ICD-10（WHO，1992）が、自閉症の多様な障害像の中から、社会性の障害、コミュニケーションの障

害、そして常同反復の3主徴を重視することにより、この感覚過敏の問題は研究者の間で次第に注目されなくなっていった。

しかし、最近、高機能自閉症の人たちの自己説明(self-account)、すなわち自らの内面を語った著作が数多く発表されるようになってから、自閉症者にとっていかに感覚過敏の問題が大きいかが、再び注目されるようになってきた。

三島ら(2002)は、感覚過敏等の障害が自閉症の診断基準である3主徴(社会性の障害、コミュニケーションの障害、常同反復)に劣らず多く認められていることを見出し、自閉症にとっての感覚過敏が単に特定の人たちだけのものではないことを明らかにした。このように感覚過敏は、現在用いられている自閉症の診断基準よりも、本人が現実的に抱く困難性の本質に近く、自閉症の核心部分との関連がより深いとの見方もなされるようになってきている(東條, 2002)。

「食育」という言葉が教育現場で良く聞かれるようになってきたが、教育として食を育てる取り組みは、各地各校で取り組まれている。特別支援学校においては、「日常生活の指導」として給食の時間もまた学習の機会として摂食の基本的な指導や食事のマナーといった指導が行われてきた。自閉症児の中には特有な感覚過敏から食べられないもの、偏食が取り上げられることが多い。食行動と関係性がある感覚過敏としては、見た目の違和感、つまり視覚過敏では、色や形など、味以前の部分で、見るだけで気持ちが悪かったり恐かったりして食べられないことがある。また味覚過敏として、何の食材でどんな味がするのか、想像がつきにくかったりすると食べられないことがある。触覚過敏としては、どんな食べ物でも、感触を確

認するために指で触れてみてからでないと口に入れることができないことがある。味覚過敏としては、三角食べのように複数の食材を混ぜて食べると、その時々で味が変わるため苦手としている場合もある。においの過敏性、つまり嗅覚過敏としては、においを嗅いでから、食べ物を口にすることで、以前食べたものと同じにおいをしているか確認していることがある（生島，2010）。特定の物しか食べない＝好き嫌いという基準で「わがまま」として接してしまうと過敏さや鈍感さを持つ苦しさをアセスメントできないまま、十分な指導が行えないと考える。そのため、自閉症児の食育において、感覚過敏は重要なテーマと思われる。

## 第 2 章 事前調査



## 第2節 本研究の目的

現在、食育など取り組みが始まってから数年経ち、障害や年齢関係なく健康への意識が高まってきている。健常児の肥満については、文部科学省により毎年全国調査が行われており、肥満が改善してきていることが報告されている。しかし、知的障害児や自閉症児を対象とした肥満や食生活に関する全国調査など、健常児と同様の内容で3群間を比較した調査はなく、最近の傾向は明らかになっていないと言える。

先行研究結果から、知的障害のみよりも自閉症を合わせ持つ方が食行動上の問題に至る背景要因が多くなり、肥満につながる要因も増えることになることが示唆されている。こうした子どもが肥満になると、更なる運動不足や偏食、肥満の進行という悪循環が始まる。また肥満を本人自身が意識できないこともあり、標準体重に近づけることへの動機付けも非常に困難である。肥満は健康状態を示す一つの指針であり、見た目にも分かりやすい特徴であると考えられる。

また、偏食や過食、拒食などの食行動上の異常が自閉症特性と関連していることが示唆されており、健康管理の観点からも食行動上の特徴を明らかにして自閉症における食事指導を考えていかなければならない。しかしながら、これまでの先行研究には、肥満の観点から自閉症児を調査しているものは散見されるものの、食行動の観点から自閉症児を調査したものはほとんどないのが現状である。

そこで本研究では、健常児や知的障害児との比較から、最近の自閉症児の体格や食行動及び感覚過敏の特徴を明らかにする。

## 第 1 節 自閉症児者へのインタビュー調査

### 1. 目的

自閉症児・者の食行動の特徴について、当事者への主観的な意識から自閉症児の食行動と障害特性を予想し、明らかにする。

### 2. 方法

#### (1) 対象

対象者は以下の 6 名であった。

- ・アスペルガー症候群の 20 代女性 1 名・20 代男性 1 名・30 代女性 2 名の計 4 名
- ・A 県で知的障害を対象とする C 特別支援学校小学部 6 年生自閉症男児の母親 1 名
- ・A 県の G 小学校の特別支援学級に在籍する 3 年生自閉症男児の母親 1 名

#### (2) 方法

調査方法は、対象者 1 人につき 1 回 30 分程度の半構造的インタビューを行った。

### (3) 期間

期間は、2010年11月13日～2011年1月19日であった。

### (4) 内容

インタビュー内容は、①食事について、②食行動について、③食生活についての3つに分かれており、全部で13項目であった。詳細項目については、以下に示す。

#### ①食事について…4項目

- ・ 噛むこと
- ・ 間食
- ・ 朝食
- ・ 早食い

#### ②食行動について…7項目

- ・ 拒食の有無
- ・ 異食の有無
- ・ 偏食の有無
- ・ 反芻の有無
- ・ 強迫的な食べる行為の有無
- ・ 盗み食いの有無
- ・ 丸呑みの有無

#### ③食生活について…2項目

- ・ 困っていること
- ・ 工夫していること

### (5) 分析方法

まず、インタビュー内容をデータ化し、共通する内容を抽出してそれぞれ概念生成、カテゴリー生成を行った。

### 3. 結果

インタビュー調査内容結果を table.2-1 に示す。

#### (1) Aさん

アスペルガー症候群の20代後半女性のAさんは、食事に関する質問項目では早食いを「よくする」こと以外では気になっていることが挙げられていなかった。食行動問題に関する質問項目では、拒食や異食などはなく、「盗み食いすることが幼少期の頃あった」のみであった。食生活に対して感じた困難には、「好き嫌いはないが、残さず食べなければならない・もったいないという思いから太ってしまうこと」があった。その問題に対して行った工夫には、「容器の大きさを小さくする」ことを挙げていた。

#### (2) Bさん

アスペルガー症候群の30代前半女性のBさんは、食事に関する質問項目では、噛む回数が「あまり噛まない」ことや早食いを「よくする」といった内容が気になっていることとして挙げられていた。食行動問題に関する質問項目では、「10～20代前半の頃に拒食だった」ことや「偏食だった」ことを挙げていた。偏食の内容では、特に好んで食べるものは「いそふりかけ・卵かけごはん・野菜炒め」などの5品、特に嫌うものも「グリーンピース・梅干しの種・ケーキのクリーム」などの5品を取り挙げており、同じような食感や食材全般を

取り上げるのではなく、1品1品の関連性が見られなかった。食生活に対して感じた困難には、「①外食では味が違って食べられないこと、②テレビを見たら食事が続かないこと、③しゃべりながら食べるのが難しいこと」を挙げていた。これらの各問題に対して行った工夫は、「①外食では決まったメニューを食べる、②外食で食べられるものがなかった場合には、食事の回数を増やす、③プレートにして食べる、④時間を決めて食記録を見る」を挙げていた。

### (3) Cさん

アスペルガー症候群の30代前半女性のCさんは、食事に関する質問項目では、間食は「時々する」が早食いは「ほとんどしない」で、気になっていることは挙げられなかった。食行動問題に関する質問項目では、全て「ない」という回答であった。食生活に対して感じた困難には、「小豆のゴツゴツ感や甘さがダメで和菓子が嫌いだったこと」を挙げていた。その問題に対して行った工夫は、「苦いお茶と一緒に食べると一緒に食べるのができた」という内容であった。

### (4) Dさん

アスペルガー症候群の20代後半男性のDさんは、食事に関する質問項目では、間食は「飲み物・菓子類」を「毎日する」が、その他で気になっていることは挙げられなかった。食行

動問題に関する質問項目では、「10代後半から25歳まで拒食だった」ことで、その時は痩せていたが、今は太っていることを挙げていた。また、「味覚過敏で偏食がある」ため、特に好んで食べるものは「毎日からあげと飲み物のピルクル」で、特に嫌うものは「トマト、辛い・酸っぱいもの」という内容であった。他にも「盗み食いをすることが高校生の時までであった」ことはあったが、異食や強迫的に食べるという行為はなかった。食生活に対して感じた困難には、「好き嫌い」を挙げており、その問題に対して行った工夫は、「給食は食べるけれども、家の食事では親は作っても自分には出さなかった」という内容であった。

#### (5) Eさん

特別支援学校の小学部に在籍する6年生男児のEさんは、食事に関する質問項目では、「好き嫌いなく口の中に食べ物をおいておける」ため嚙む回数は「あまり嚙まない」、間食は「毎日する」、「給食、朝食はあまり食べない」ため朝食は「ほとんど取らない」、早食いを「よくする」など、全ての項目を気になっていると答えていた。食行動問題に関する質問項目では、「1歳半頃から感じていた」偏食と反芻、「冷蔵庫に鍵をつけて」対策をとっている盗み食いについて、「ある」と挙げていた。食生活に対して感じた困難には、「①単品しか食べられないため、いろいろな食材で調理された料理が嫌いなこと、②食べたいものにブームの期間があること、③満腹感が感じ

にくいこと、④遊びながら食べることを挙げていた。これらの各問題に対して行った工夫としては、「①2週間に1回、学校で体重を測定する、②18時半に夕飯を食べる」という内容であった。

#### (6) Fさん

小学校の特別支援学級に在籍している3年生男児のFさんは、食事に関する質問項目では、間食は「時々する」、早食いは「ほとんどしない」で、気になっていることは挙げられなかった。食行動問題に関する質問項目では、どの項目も「ない」という回答であった。食生活に対して感じた困難には、「何も言わなかったらテーブルの上のおかずがなくなるまで食べ続ける」ことを挙げ、その問題に対して行った工夫としては、「お皿に取り分けて、これだけが今日食べる分と言って出す」という内容であった。

#### 4. 考察

自分の食生活についてという主観的なインタビュー調査を行ったが、どの対象者でも「ある」との回答内容が多かった項目は「早食い」と「偏食の内容」、「食事に対して感じた困難」と「食生活で行った工夫」についてであった。

### (1) 早食い

「早食い」は、「よくする」と答えた対象児者の他の項目を見てみると、「偏食」や「盗み食い」をしていたことが分かった。その理由としては、「偏食」で好きな食べ物ばかりを食べ、食事形態が「ばっかり食べ」の状態であったり、「盗み食い」で食べ続けてしまったりすることから、早く食べてしまうことが考えられた。

### (2) 偏食の内容

「偏食の内容」は、BさんやDさんのように好きな偏食と嫌いな偏食が数多くあげられたり、Eさんのように食感や味付けのこだわりを持って食べることがあったりして、個人によって内容にばらつきがあった。

### (3) 食事に対して感じた困難

「食事に対して感じた困難」では、「外食や複数の食材を混ぜた料理で、味が変わると食べられない」や「1つの食べ物に集中して食べ続けてしまったり、他のことが気になると食べられなかったりすること」といった、自閉症の障害特性である「こだわり」と関連するような内容が挙げられていた。

### (4) 食生活で行った工夫

「食生活で行った工夫」では、「時間を決めて食事をする」や「食器の大きさを小さくして、食事量を減らす」が共通した工夫で挙げられていた。つまり、前述した「偏食の内容」



は個人によってばらつきがあっても、感じる困難や工夫は共通した内容が多いということが分かった。

これら2つの項目に対し、「ある」との回答内容が少なかった項目は、「異食」や「丸呑み」であり、「反芻」を「ある」と回答したEさんも知的障害の特性として現れた可能性が示唆された。

#### (5) 次調査での課題

これらを踏まえ、質問紙調査の質問項目を作成するために、以下のことに配慮した。次調査では、「ある・なし」の選択回答と自由記述にすることで、回答者が答えやすい実数把握を目的とした調査を行うこととする。質問項目には、「異食」と「丸呑み」を除き、「感じる困難」で挙げられていた「他のことが気になると食べられなかったりすること」として「～ながら食べ」を設問に加えることとした。これらの質問項目に、「その食行動に対する悩み」と「その食行動に対する工夫」を設問に加え、それぞれの食行動の実態を実数としての把握を深めることとした。また「感じる困難」を「気になること」という質問に変更し、より多くの実数を取り上げられるようにすることにした。以上の考察から、次調査では、食行動についてより詳しく質問することで、知的障害と自閉症の行動特性を比較して考察する必要があると考えられた。



## 第 2 節 特別支援学校での質問紙調査

### 1. 目的

事例研究などの先行論文を踏まえ、知的障害児の食行動上の特徴について自閉症の有無での相違を明らかにする。

### 2. 方法

#### (1) 対象

対象者は、A 県で知的障害を対象とする C 特別支援学校の小・中学部児童生徒の保護者 22 名であった。

#### (2) 方法

調査方法は、各児童生徒の担当教員から児童生徒経由で質問紙を配布し、回収を行った。回答は無記名とした。

#### (3) 期間

調査期間は、2011 年 2 月 23 日～3 月 4 日であった。

#### (4) 内容

調査内容は、「児童生徒の食生活に関するアンケート」と題

した、質問紙調査を行った。質問内容は以下の通りである。

- ・ 児童生徒の情報…4項目

(性別、年齢、身長、体重)

- ・ 食行動に関する質問項目…7項目

(噛むこと、間食、早食い、～ながら食べ、拒食・欠食、偏食、その他の気になる食行動)

\* 各質問項目それぞれに4件法の選択及び自由記述で回答を求めた。

(頻度・気になること・工夫していること)

### (5) 分析方法

分析方法は、表計算ソフトMicrosoft Excel を用いて集計処理を行った。

障害の種類で「自閉症」に選択回答した児童生徒を「自閉症群」とし、「自閉症」に選択回答しなかった児童生徒を「非自閉症群」とし、両群間で「ある」と回答した割合の比較を行った。

## 3. 結果

### (1) 回収結果

回収は、自閉症を合併する児童生徒「自閉症群」9名(小学部4名、中学部5名)と知的障害のみの児童生徒「非自閉

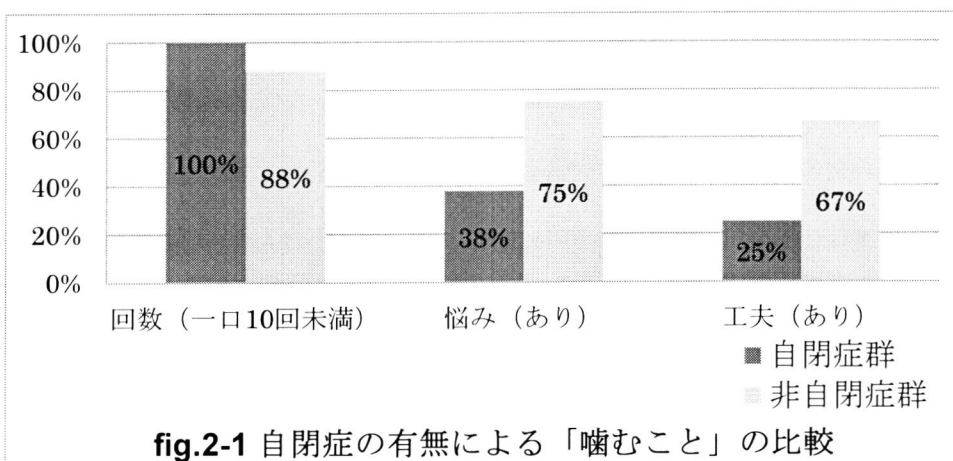
症群」9名（小学部1名、中学部8名）の計18名で、有効回答率は81.8%であった。

## （2）詳細内容

### ① 噛むこと

自閉症の有無による「噛むこと」の比較結果を fig.2-1 に示す。

噛む回数は、自閉症群の方が少し少ないが、気にしている割合と工夫している割合は非自閉症群の方が高い傾向にあった。非自閉症群において、噛まないことは、全ての質問項目の中で1番気にしている・工夫している割合が高い結果となった。



「悩みの内容」には、自閉症群と非自閉症群ともに「早食い」「水分で流し込む」「固い物を食べない」「丸飲み」が挙げられたが、自閉症群や非自閉症群のみに挙げられた内容はなかった。

「工夫の内容」には、自閉症群と非自閉症群ともに「水分

は要求があれば出す」「具を大きくする」が、自閉症群のみの回答には「具を小さくする」が、非自閉症群のみの回答には「ゆっくり噛んでと声かけをする」「噛みごたえのある食べ物を出す」が挙げられた。

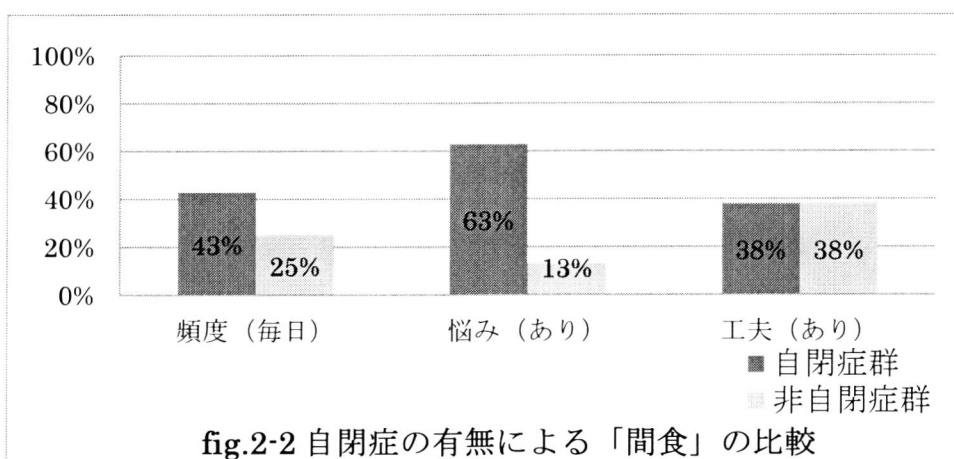
## ② 間食

自閉症の有無による「間食」の比較結果を fig.2-2 に示す。

自閉症群において、間食を気にしている割合は全ての質問項目の中で2番目に高い結果となった。それに対し、非自閉症群においては、2番目に低い結果となった。

\* 「間食」で多いもの

- ・ 自閉症群…4件：スナック菓子 2件：パン・芋類・チョコ
- ・ 非自閉症群…3件：フルーツ・パン 2件：スナック菓子



「悩みの内容」には、自閉症群のみから回答があり「1日を通しての食べた量」「塩分の取り過ぎ」「一度に食べる数の要求がある」「食べる時間」「夕食が食べられず残す」が挙げられた。

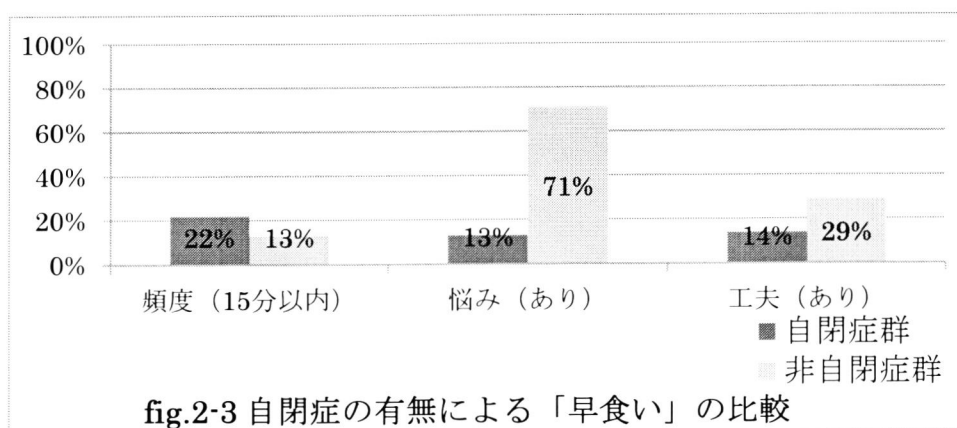
「工夫の内容」には、自閉症群のみから回答があり「最初

に内容と数を決める」「食べたがるものは置かない」「勝手に食べさせない」「少し固めの物を食べさせる」が挙げられた。

### ③ 早食い

自閉症の有無による「早食い」の比較結果を fig.2-3 に示す。

早食いは、どちらも多くないが、非自閉症群では、気にして工夫している傾向があった。自閉症群において、早食いを気にしている割合・工夫している割合ともに、全質問項目の中で1番気にしている割合が低い結果となった。自閉症児の保護者にとって、早食いよりも他の行動が気になることが多いことが考えられる。非自閉症群においては、噛む回数の少なさに次いで気になる割合が高かったが、工夫している割合は全質問項目の中でも低い傾向であった。



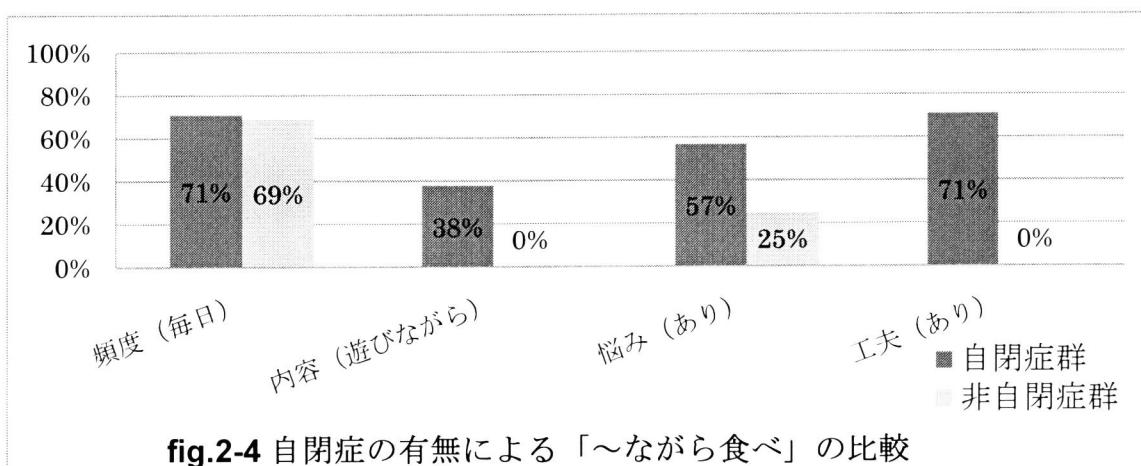
「悩みの内容」には、自閉症群と非自閉症群ともに「量が多くなる」が挙げられ、非自閉症群のみの回答には「お腹が空いていると早い」「よく噛まない」「うどんやカレーなどは、丸飲み」が挙げられた。

「工夫の内容」には、自閉症群と非自閉症群ともに「一品ずつ時間をあけて出す」が挙げられ、非自閉症群のみの回答には「切り方を大きめにする」「こちらで量を決める」「もう終わりと声かけをする」が挙げられた。

#### ④～ながら食べ

自閉症の有無による「～ながら食べ」の比較結果を fig.2-4 に示す。

自閉症群と非自閉症群の回答傾向は、頻度はほぼ同じだが、その内容・気にしている割合・工夫している割合に差が出る結果となった。自閉症群は、遊びながら食べる割合が高く、非自閉症群はTVを見ながら食べることのみであった。自閉症群は、気にしている割合・工夫している割合ともに高い傾向があった。



「悩みの内容」には、自閉症群と非自閉症群ともに「テレビを見て手をとめてしまう」が挙げられ、自閉症群のみの回答には「集中して食べない」が、非自閉症群のみの回答には「食事をこぼすことがある」が挙げられた。

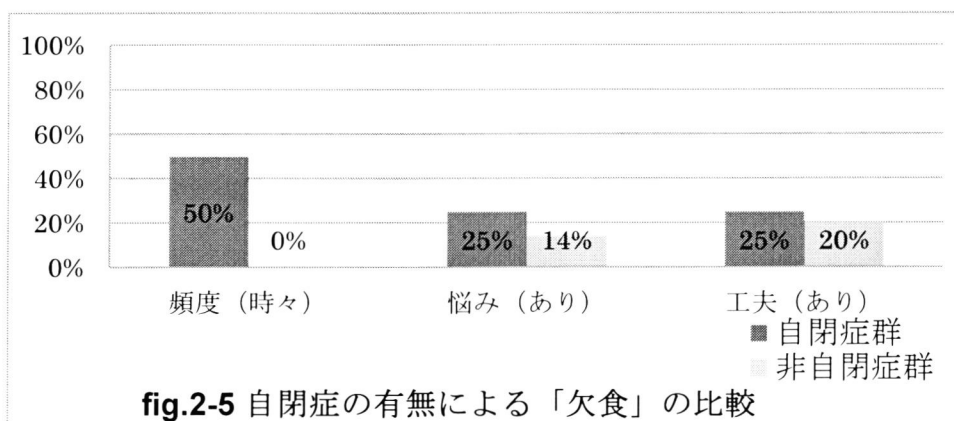


「工夫の内容」には、自閉症群のみから回答があり「注意を聞かない時は取り上げる」「テーブルの上はきれいにする」「いつもと違う部屋で食事をする」「声をかけて片付けさせる」が挙げられた。

### ⑤ 拒食・欠食

自閉症の有無による「欠食」の比較結果を fig.2-5 に示す。

欠食は両群ともに朝食についての回答のみであった。気にしている割合・工夫している割合ともに自閉症群の方が高く、時々朝食を欠食する頻度が50%と、非自閉症群と差があった。



「悩みの内容」には、自閉症群のみの回答には「生活リズム」「朝、食欲が無い」が、非自閉症群のみの回答には「朝が起きられず、食べない」「朝寝坊したら、すぐ食事をとれない」が挙げられた。

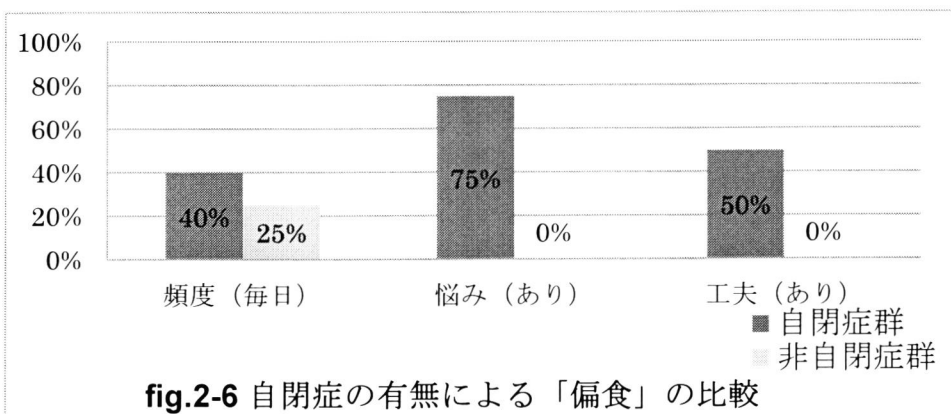
「工夫の内容」には、自閉症群のみの回答には「登校時に朝食を持参する」「帰宅後、お腹がすいたら食べる」が、非自閉症群のみの回答には「できるだけ早く寝かせ、起こす」が挙げられた。

## ⑥ 偏食

自閉症の有無による「偏食」の比較結果を fig.2-6 に示す。

自閉症群は、偏食について頻度の悩み・工夫ともに割合が高く、そのほとんどの保護者が気にしているという傾向にあった。自閉症群において、偏食は、工夫している割合もともに、全ての質問項目の中で1番高い割合を示した。自閉症群と非自閉症群との比較では、偏食の頻度はほとんど変わらないが、気にする・工夫する割合が高くなっていた。

よく食べるものはごはん類や麺類などの炭水化物、肉類、煮野菜が多かった。食べないものを挙げる割合は、自閉症群（1人あたり3.0個）が非自閉症群（1人あたり1.7個）より多かった。



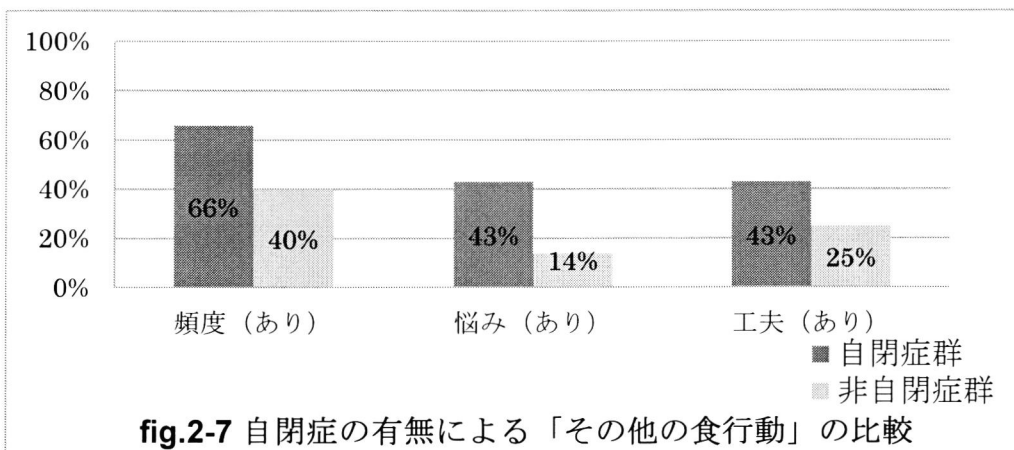
「悩みの内容」には、自閉症群のみから回答があり「手の込んだ料理は食べない」「感覚過敏」「栄養バランス」が挙げられた。

「工夫の内容」には、自閉症群のみから回答があり「一度食べたものはチャレンジする」「細かく切り混ぜる」「同じ栄養のあるものを出す」「他2食で栄養バランスを考える」が挙げられた。

### ⑦その他の気になる食行動

自閉症の有無による「その他の食行動」の比較結果をfig.2-7に示す。

その他の食行動で気になる割合・工夫している割合ともに、自閉症群の方が高い傾向にあった。自閉症群の保護者が気にしている内容には、食べ物そのもののこと以外で、マナーや食器についてなどが挙げられていた。それらは障害特性との関連が示唆される。



「悩みの内容」には、自閉症群のみの回答には「食べ方のマナーの悪さ」「毎日同じものを必ず食べる」「異食」が、非自閉症群のみの回答には「喉に詰まらせて、口の中に出す」が挙げられた。

「工夫の内容」には、自閉症群のみの回答には「口から出してもいいお皿と手ふきを用意する」「家族が食べるメニューに興味を持たせる」「口に入れそうな物は置かない」が、非自閉症群のみの回答には「なるべく細かく切る」が挙げられた。

#### 4. 考察

全体としては、自閉症群の方が食行動を「気にしている」「工夫している」割合が高かった。しかし、今回の調査では、生島（2010）の先行研究において、偏食や異食の要因としては過敏性やこだわり行動が考えられていたが、自由記述に挙げられた内容は少なかった。

自閉症群の間食頻度が高い背景要因としては、朝食を時々欠食する割合と間食を時々する割合が多いことから、カロリーを補うため食事として間食が位置付けられる場合がある可能性が示唆された。

「偏食」の質問項目では、絶対に食べないものは生野菜、生魚、煮物や豆類などの昔ながらの料理が多かった。工夫内容は自閉症群のみから回答があり、他の食べ物が食べられるような「調理の工夫」・栄養バランスとして「栄養面の配慮」・偏食があっても健康状態を維持・改善するための「メニューの工夫」・「精神状態の改善」に分類できた。それぞれの内容を見てみると、自閉症群は、食べないことに関しての記述が多く、感覚過敏やこだわり行動などで偏食が強く現れる可能性が示唆される。

そのため、「偏食」を「食べたがる偏食」と「食べたがらない偏食」に分類し、設問に加えることで保護者の意識をより明確にする必要性が考えられた。また、食行動の背景要因と考えられている「見た目の違和感」「味覚過敏」「触覚過敏」「食感の違い」「におい」「字義どおりの受け取り方」を本調査では選択回答に加えることとした。

## 第 3 節 小学校での質問紙調査

### 1. 目的

知的障害を対象とする特別支援学校で自閉症の有無での比較を行う本研究において、健常児の食行動や感覚過敏を明らかにすることで、知的障害特有の食行動や感覚過敏があるかどうかを考察する。

### 2. 方法

#### (1) 対象

対象は、A 県内の B 小学校の児童 600 名の保護者とした。

#### (2) 方法

調査方法は、各児童生徒の担当教員から児童生徒経由で質問紙を配布し、回収を行った。回答は無記名とした。

#### (3) 期間

調査期間は、2011 年 10 月 11 日～10 月 25 日であった。

#### (4) 内容

調査内容は、「お子さんの食生活に関するアンケート」と題した、質問紙調査を行った。調査用紙は、

- ・対象者情報…8項目

(回答者、性別、年齢、身長、体重、睡眠、疾病の有無、保護者から見た子どもの体型印象)

- ・感覚の過敏さ…5項目

(聴覚過敏、視覚過敏、触覚過敏、味覚過敏、嗅覚過敏)

- ・食行動上の特徴に関する質問…19項目

(偏食、噛む回数が少ない、食べる速さが速い、ぱっかり食べをする、等) \*それぞれを選択回答した。

- ・食生活について…4項目

(気になること・工夫していること・困っていること・改善したこと) \*それぞれを自由記述で回答した。

#### (5) 分析方法

分析方法は、表計算ソフトMicrosoft Excel を用いて集計処理を行った。1年生から3年生の児童を「低学年群」とし、4年生から6年生の児童を「高学年群」とした。

選択回答項目では、学年群別で「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」を合わせた「当てはまる」への回答割合による2件法で比較を行った。

肥満度は、文部科学省の平成22年度「学校保健統計調査」と同じく、財団法人日本学校保健会「児童生徒の健康診断マ

ニュアル（平成 18 年度改訂版）」によって身長別標準体重を算出し、年齢・性別から測定した。

### 3. 結果

#### （1）回収率

回収は、低学年 265 名（1 年生 93 名、2 年生 91 名、3 年生 81 名）、高学年 223 名（4 年生 83 名、5 年生 72 名、6 年生 68 名）の計 488 名で、有効回答率は 81.3%であった。

#### （2）基本情報

##### ①回答者

回答者は、低学年においては、99%が「母親」、1%が「父親」で、高学年においては、98%は「母親」、1%が「父親」であった。

##### ②性別

性別は、低学年においては、49%が「男子」、51%が「女子」、高学年においては、51%が「男子」、49%が「女子」であった。

##### ③疾病の有無

疾病の有無は、低学年においては、8%が「食物アレルギー」、

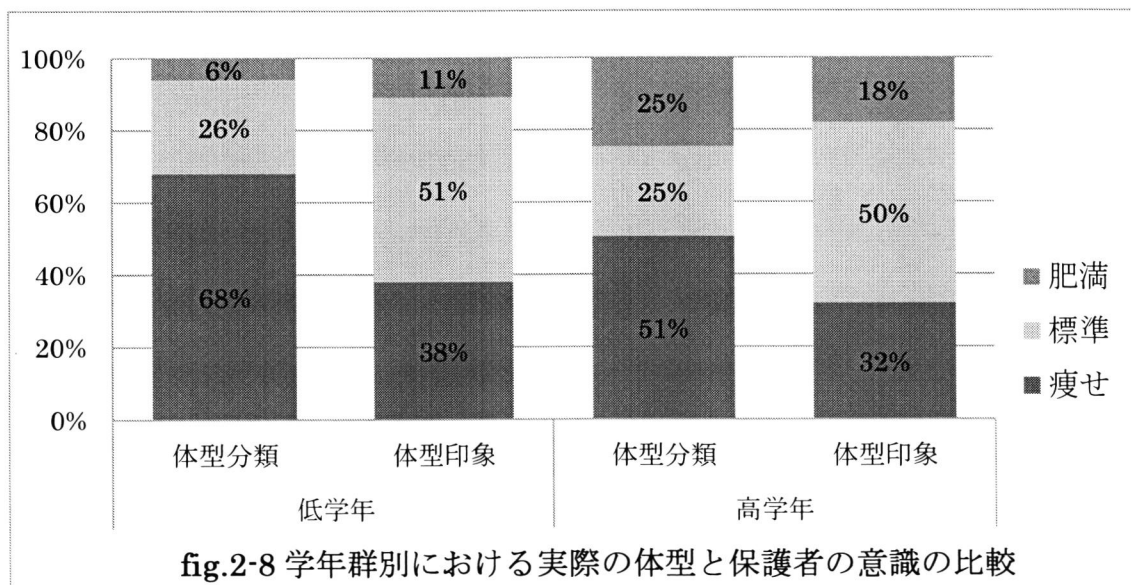
10%が「その他の疾病」、83%が「特になし」であった。高学年においては、8%が「食物アレルギー」、13%が「その他の疾病」、80%が「特になし」であった。

#### ④ 体型分類・体型印象

体型分類として、肥満度を使用した。学年群別における体型分類と体型印象の比較を行った結果を fig. 2-8 に示す。

低学年における体型分類では、68%が「痩せ」、26%が「標準」、6%が「肥満」であった。体型印象では、38%が「痩せ」、51%が「標準」、11%が「肥満」であった。

高学年における体型分類では、51%が「痩せ」、25%が「標準」、25%が「肥満」であった。体型印象では、32%が「痩せ」、50%が「標準」、18%が「肥満」であった。



#### ⑤ 目覚めの悪さ・朝食欠食

「目覚めの悪さ」においては、低学年の66%と高学年の28%



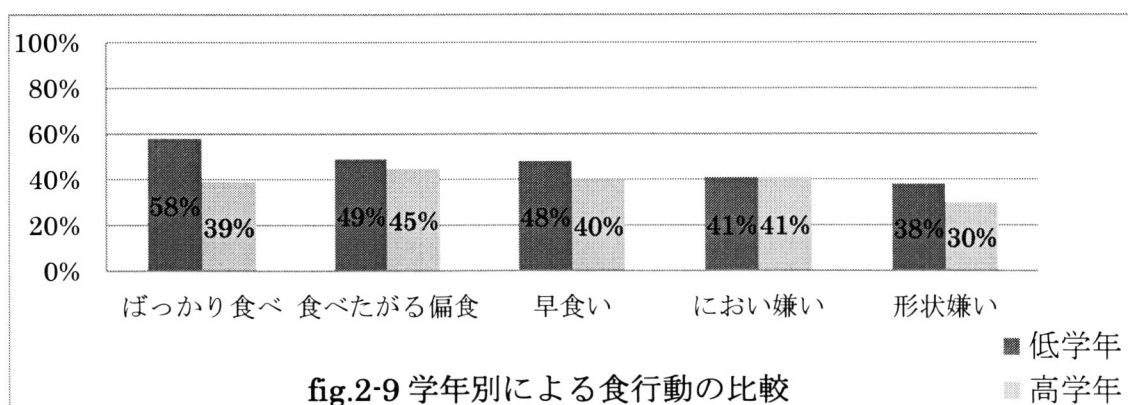
が「ある」と答え、「朝食欠食」においては、低学年の28%と高学年の26%が「ある」との回答であった。

### (3) 食行動

学年別で回答割合が上位の5項目について比較を行った。その結果をfig. 2-9に示す。

低学年児童においては、「ばかり食べ」というものが最も多く(58%)、次いで「食べたがる偏食」(49%)、「早食い」(48%)、「におい嫌い」(41%)、「形状嫌い」(38%)というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「食べたがる偏食」というものが最も多く(45%)、「におい嫌い」(41%)、「早食い」(40%)、「ばかり食べ」(39%)、「食べ物を口に含んだまま飲み込まない」(30%)というものであった。



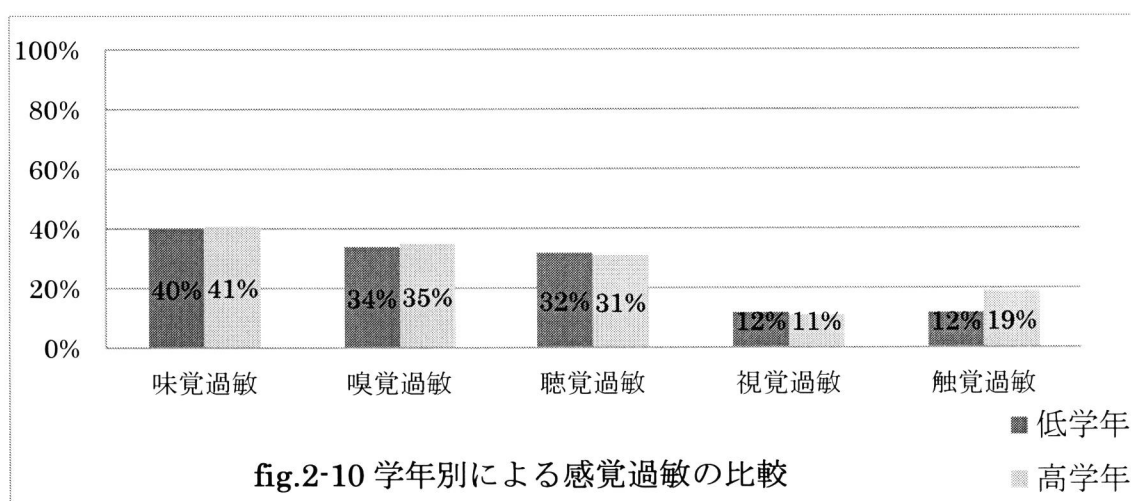
### (4) 感覚過敏

学年別による感覚過敏の比較を行った結果をfig. 2-10に示

す。

低学年児童においては、「味覚過敏」というものが最も多く（40%）、次いで「嗅覚過敏」（34%）、「聴覚過敏」（32%）、「視覚過敏」（12%）、「触覚過敏」（12%）というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「味覚過敏」というものが最も多く（41%）、「聴覚過敏」（35%）、「嗅覚過敏」（31%）、「触覚過敏」（19%）、「視覚過敏」（11%）というものであった。



#### （5）保護者の意識

それぞれの自由記述において、回答内容の割合が上位であった項目を取り上げ、比較することとする。

##### ① 気になること

学年別による保護者が児童の食生活で「気になっていること」の内容比較を行った結果をtable.2-2に示す。

低学年児童においては、「好き嫌い」というものが最も多

く（47％）、次いで「少食」（21％）、「食べるのが遅い」（12％）、「ばっかり食べ」（10％）というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「好き嫌い」というものが最も多く（48％）、「野菜不足」（25％）、「ばっかり食べ」（10％）、「食べ過ぎ」（9％）というものであった。

table. 2-2 学年別による「気になっていること」の比較

	1	2	3	4	5
低学年 群	好き嫌い	少食	遅い	ばっかり 食べ	その他
	47%	21%	12%	10%	10%
高学年 群	好き嫌い	野菜 不足	ばっかり 食べ	食べ過ぎ	その他
	48%	25%	10%	9%	8%

## ②工夫していること

学年別による保護者が児童の食生活で「工夫していること」の内容比較を行った結果をtable. 2-3に示す。

低学年児童においては、「野菜摂取」というものが最も多く（49％）、次いで「バランスをよくする」（15％）、「細かく切る」（14％）、「調理法の変更」（13％）というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「野菜摂取」というものが最も多く（25％）、「バランスをよくする」（16％）、「調理法の変更」（13％）、「細かく切る」（10％）というものであった。

table.2-3 学年別による「工夫していること」の比較

	1	2	3	4	5
低学年群	野菜 摂取	栄養 バランス	細かく 切る	調理法 の変更	その他
	49%	15%	14%	13%	9%
高学年群	野菜 摂取	栄養 バランス	調理法 の変更	細かく 切る	その他
	25%	16%	13%	10%	36%

### ③ 困っていること

学年別による保護者が児童の食生活で「困っていること」の内容比較を行った結果をtable.2-4に示す。

低学年児童においては、「好き嫌い」というものが最も多く（38%）、次いで「食事マナー」（16%）、「少食」（13%）、「ぼっかり食べ」（10%）というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「好き嫌い」というものが最も多く（45%）、「間食」（23%）、「食べるのが遅い」（11%）、「マナー」（11%）というものであった。

table. 2-4 学年別による「困っていること」の比較

	1	2	3	4	5
低学年 群	好き嫌い	食事 マナー	少食	ばっかり 食べ	その他
	38%	16%	13%	10%	23%
高学年 群	好き嫌い	間食	遅い	食事 マナー	その他
	45%	23%	11%		10%

#### ④ 改善したこと

学年別による保護者が児童の食生活で「改善したこと」の内容比較を行った結果をtable. 2-5に示す。

低学年児童においては、「食べる量が増えた・減った」というものが最も多く（32%）、次いで「食わず嫌いが少なくなった・なくなった」（32%）、「朝食をしっかりと食べるようになった」（14%）、「食べられるものが増えた」（11%）というものであった。

低学年に対し、高学年においては、「食べられるものが増えた」というものが最も多く（40%）、「食べる量が増えた・減った」（21%）、「間食の内容」（12%）、「食べるのが速くなった」（7%）というものであった。

table. 2-5 学年別による「改善したこと」の比較

	1	2	3	4	5
低学年 群	食べる量	食わず 嫌い	朝食 摂取	食べら れるも の	その他
	32%		14%	11%	11%
高学年 群	食べられ るもの	食べる 量	間食	食べる 速度	その他
	40%	21%	12%	7%	20%

#### 4. 考察

##### (1) 体型分類・体型印象について

###### ① 体型分類

低学年群と高学年群を比較してみると、「痩せ」の割合が68%から51%、「標準」の割合が26%から25%、「肥満」の割合が6%から25%に変化していた。つまり、学年が上がるにつれ、「痩せ」は減り、「標準」は変化がなかったが、「肥満」が約4倍まで増える傾向が見られた。

平成22年度の文部科学省による「学校保健統計調査」の結果では、瘦身傾向児の出現率は低学年群の最大値で8歳男子の約1.0%、高学年群の最大値で11歳女子の約3.1%であった。一方、肥満傾向児の出現率は低学年群の最大値で8歳男子の約7.2%、高学年群の最大値で11歳男子の約11.1%であった。

文部科学省の調査結果と比較してみると、「痩せ」の割合、「肥満」の割合ともに高く、学年が上がるにつれての変化を見ても、「痩せ」の割合は減っても依然として高い割合を示し、「肥満」の割合の増え方は文部科学省の調査結果よりも大きい傾向にあった。つまり、今回の調査では、多くの先行研究で述べられている「肥満」の割合は多いが、「痩せ」の割合の方が高く、「痩せ」の問題にも意識を向ける必要があると考えられた。

## ② 体型印象

低学年群と高学年群を比較してみると、「痩せ」の割合が38%から32%、「標準」の割合が51%から50%、「肥満」の割合が11%から18%に変化していた。つまり、学年が上がるにつれ、「痩せ」は減り、「標準」は変化がなかったが、「肥満」が増える傾向が見られた。

## ③ 体型分類と体型印象の比較

低学年群と高学年群ともに実際の数値よりも痩せていないと感じている保護者が多いことが分かった。このことには、「肥満」への意識は高いと考えられた。しかし、実際には体型分類では「痩せ」の割合が両群ともに過半数を占めているが、体系印象では「肥満」の割合が約半数を占めていることから、「痩せ」への意識が低いことも挙げられた。

低学年群では、体型が「痩せ」ていても「標準」だと感じたり、「標準」であっても「肥満」だと感じたりしている傾

向が見られた。高学年群では、体型が「痩せ」ていても「標準」だと感じたり、逆に「肥満」であっても「標準」だと感じたりしている保護者もいることから、成長が著しい時期においては保護者であっても体型の変化を正確に意識することは難しく、「痩せ」や「肥満」に気付きにくい可能性が考えられた。

## (2) 食行動について

低学年群で回答割合が過半数を超えた項目は、おかずとご飯を交互に食べる三角食べができない「ばかり食べ」のみであった。高学年群では、回答割合が過半数を超えた項目はなく、「ばかり食べ」は39%であったことから、低学年群との間で差が見られた。他の4項目についても、低学年群の方が高い割合を示していたが、似た傾向を示しており有意な差は見られなかった。

つまり、学年が上がるにつれ、「ばかり食べ」が減って三角食べができることが増えたり、「食べたがる偏食」が減って食べられるものが増えたり、「早食い」が減って適度な時間をかけて食事ができるようになったり、「形状嫌い」が減って見た目では好き嫌いを判断しなくなったりしている児童がいることが示唆された。



### (3) 感覚過敏について

低学年群と高学年群を合わせた回答割合を見てみると、「味覚過敏」、「嗅覚過敏」、「聴覚過敏」、「触覚過敏」、「視覚過敏」の順に多い傾向が見られた。しかし、回答割合が過半数を示した項目はなく、一番高い割合であった「味覚過敏」が約40%、一番低いであった「視覚過敏」が約11%という結果であった。学年群別に見て順位が違ったのは、「触覚過敏」と「視覚過敏」のところであり、低学年群では「視覚過敏」の方が高い割合を示した。しかし、どの項目も両群ともに似た回答割合を示しており、著しい差は見られなかった。

### (4) 保護者の意識について

#### ① 気になっていること

低学年群と高学年群ともに「好き嫌い」が一番高い割合であり、低学年群が47%、高学年群が48%という結果から、学年間での変化は見られなかった。また「ばっかり食べ」の割合も両群ともに10%であることから、この2項目は両群で共通して変化が表れにくい食行動であると考えられた。

次に、各学年群の項目を比較してみると、低学年群は、「少食」や「食べる速度が遅い」ことから、「食べないこと」を保護者は気にしていると考えられた。低学年群に対し、高学年群は、「野菜不足」や「食べ過ぎ」が上位項目に挙がってきていることから、「好きなものばかりを食べること」を保護者は気にしていると考えられた。

## ②工夫していること

低学年群と高学年群ともに一番高い割合である「野菜摂取」の割合は、低学年群が49%、高学年群が25%であり、「細かく切る」の割合は、低学年群が14%、高学年群が10%、「その他」の割合は低学年が9%、高学年が36%であることから、学年が上がるにつれ、「野菜摂取」や「細かく切る」以外の工夫が増えていくことが示唆された。また「栄養バランス」の割合は両群ともに約15%、「調理法の変更」の割合は両群ともに13%であることから、この2項目は両群で共通して変化が生じにくい工夫であると考えられた。

## ③困っていること

低学年群と高学年群ともに「好き嫌い」が前述した「気になっていること」と同じく一番高い割合であった。低学年群が38%、高学年群が45%という結果から、学年が上がるにつれ、割合が高くなる傾向が見られた。

## ④改善したこと

低学年群と高学年群で共通した上位項目は、「食べる量」と「食べられるものが増えた」の2項目であった。「食べる量」は、低学年群が32%、高学年群が21%であることから、学年が上がるにつれ、割合が低くなる傾向が見られた。「食べられるものが増えた」は、低学年群が11%、高学年群が40%であることから、学年が上がるにつれ、割合が高くなる傾向が見られた。しかし、内容として考えると、低学年群で「気にな

なっていること」の上位項目に挙げられていたのは「少食」の21%であり、「食べる量が増えた」ことを示唆していると考えられる。一方、高学年群で「気になっていること」の上位項目に「食べ過ぎ」も9%と挙がってきており、肥満の増加を踏まえると、中には増えすぎる場合もあることが示唆された。